

心の宝

令和5年
新年号

誇り、
控えめな優しさ

花言葉

ツバキ
(和名・椿)



宗華法本顯

年回法要について

年回法要は、一周忌・三回忌・七回忌・十三回忌・十七回忌・二十三回忌・二十七回忌・三十三回忌・五十回忌・百回忌の順でおつとめします。

地方によっては、二十三回忌・二十七回忌の代わりに二十五回忌をつとめる所もあり、また、三十七回忌・四十三回忌・四十七回忌をつとめる地域もありますので、詳しくは菩提寺にお尋ねください。

新年を迎えるにあたり仏壇を清掃して、位牌等で回忌を確認し、回忌が分かったら早目に菩提寺に連絡して、年回法要をおつとめしましょう。

また、年回にかかわらず、毎年の祥月命日（亡くなった当日）には、大切に供養いたしましょう。



【令和五年 年回表】

回忌	年
一周忌	令和四年
三回忌	令和三年
七回忌	平成二十九年
十三回忌	平成二十三年
十七回忌	平成十九年
二十三回忌	平成十三年
二十五回忌	平成十一年
二十七回忌	平成九年
三十三回忌	平成三年
三十七回忌	昭和六十二年
四十三回忌	昭和五十六年
四十七回忌	昭和五十二年
五十回忌	昭和四十九年
百回忌	大正十三年

信徒の心得

- 一、私たちの宗旨は顕本法華宗です
- 一、顕本法華宗の総本山は京都の妙満寺です
- 一、私たちは日蓮大聖人が定められた大曼荼羅を御本尊として篤く仏・法・僧の三宝さまに帰依します
- 一、私たちは妙法蓮華経と日蓮大聖人の御書を教えの拠り所とします
- 一、私たちはお釈迦さまを教主と仰ぎ日蓮大聖人を宗祖日什大正師を開祖として経巻相承を宗是とします
- 一、私たちはお釈迦さまの大慈大悲を信じて努めて菩薩の行を実践します

目次

年頭法話……………	2
新年のごあいさつ……………	4
まなびの時間……………	6
聖訓カレンダー……………	9
京都日蓮聖人門下連合会主催 日蓮大聖人御報恩 御会式 ……	12
顕本法華宗 総本山妙満寺 第741回 宗祖日蓮大聖人報恩 御会式 ……	13
写して学ぼう 写経体験 ……	14
ぶらり寺々を訪ねて……………	16
住職からのまごころ一品……………	18
学んでつくつむケンボンクイズ…	20
宗門だより……………	21
本山だより……………	23
年賀広告……………	24

年頭法話

顕本法華宗管長 大川日仰
総本山妙満寺貫首



寿 春

令和5年、新年のお慶びを申し上げるとともに、併せて天下泰平・国土安穩・皆帰妙法をお祈り申し上げます。顕本法華宗の根本教義は、「経卷相承 直受法水(日蓮)」であり、「教主釈迦牟尼仏、宗祖日蓮大聖人、開祖日什大正師、並びに正義伝灯の先師先聖」の教えを信仰する教団です。

日蓮大聖人は建長5年4月28日、清澄山山頂の旭ヶ森から登り来る太陽に向かって声高らかに「南無妙法蓮華経」を唱えられ、立教開宗されました。

大聖人はお題目の功德について『聖愚問答鈔』の中で、

只南無妙法蓮華経とだにも唱へ奉らば、滅せぬ罪や有べき、来らぬ福や有べき。真実也。甚深也。是を信受すべし

とご教示されています。

本宗では、南無妙法蓮華経を唱えることを「正行」として、至心に唱題に励

むことにより、私たち(行者)は本仏釈尊から安心の功德をいただくことができると説いています。

このことを明治、大正、昭和初期にご活躍された本多日生上人(総本山妙満寺第259世、第261世)は、

本宗は妙法の本済力と、釈尊の本願力と、行者の信念力と、三力感応する時は即時に仏因を決定し、命終の時、一刹那間に仏果を莊嚴し、常住の浄土を感得し、以って常楽我浄の境界に逍遙すべしと確信し、満足するを以って行者の安心となす

と教えていただいております。(『本宗綱要全総ルビ版』第十章 行者安心 より) 教主釈尊の、衆生を救済せんとされる大慈大悲の「本願力」と、本仏渴仰の衆生である私達の「信念力」、この二つが南無妙法蓮華経の「本済力」で結ばれることを「感応道交」といい、そして私達が、迷いの世界から悟りの世界(転迷開悟)に入ることを「唱題成仏」と申します。

新年を迎え、本仏釈尊の实在を憶念して、お題目を家族一同で唱え、信仰のある明るい家庭を築いてまいりましょう。

南無妙法蓮華経 合 掌

新年のごあいさつ

顕本法華宗 宗務総長 河野時巧



謹んで年頭のご挨拶を申し上げます

新型コロナウイルスの蔓延や、ロシアのウクライナへの侵略戦争等が檀信徒皆さまの心や生活に与える影響は計り知れません。心からお見舞い申し上げます。

さて、新年に当たり、一年の安穩を願ってそれぞれの道場で「お題目・南無妙法蓮華経」とお唱えになられたと存じます。

南無とは「帰依する」や、「心から信仰いたします」という意味です。したがって、私たちは「心から妙法蓮華経に帰依し、命がけて信仰いたします」とお唱えしているのです。

「お題目」には、『法華経』のすべての功德が備わっています。ですから私たちは、生半可な気持ちでお題目を唱えてはならないのです。心身を清らかにして、お釈迦さまと一体になることを念じて、真剣にお題目をお唱えいたしましょう。

日蓮大聖人は『観心本尊抄』の中で、

釈尊の因行・果徳の二法は、

ことごとく妙法蓮華経の五字に具足す

我らこの五字を受持すれば、

自然に彼の因果の功德を譲り与えたもうなり

と教え示されております。この尊い法華経の教えを心から信仰し、お題目をお唱えすることによって、私たちの心とお釈迦さまの心が交じり合うのです。

さて、佐渡にて大聖人がお著しになった『観心本尊抄』は、正式な題を『如来滅後五百歳始観心本尊抄』といい、今年は著述後七五〇年に当ります。

『大集経』というお経によると、仏の滅後には五百年ごとに仏教の衰微が進んでいき、五番目の五百年間のはじめ……つまり「如来滅後五・五百歳始」には、「末法」と呼ばれる最悪の時代が到来します。今まさにその時です。

檀信徒の皆様、心から朝夕にお題目をお唱えし、末法の時代であっても、大聖人のお示しになられた法華経に基づいた正しい生き方を実践いたしましょう。

南無妙法蓮華経

法華經の文字は

皆生身の佛なり

布教総監 東京都豊島区法成寺住職

秋葉敬真



新しき年を迎え ご平安のよき日々でありますことを お祈りいたします

書の楽しみについて少しお話をいたしましょう。

昨年から、この『心の宝』誌に「写経」が体験できるコーナーが掲載されていますが、お気付きでしょうか。

そのお手本を、僭越ながら謹書させていただきます

ただいておりますので、このたびは写経と

お経の文字を書き写すことは、古くはインドの大乗仏教においてすでに行われ、印刷という技術のない時代に、経文を覚え伝えるために、原文を書写することから始まりました。

以来、写経は書写行と申しまして、「法

華経法師品」に法華経修行の大切な五つ(五種法師)のひとつに示されています。

- 一 受持…経文・経典を受け持つこと
- 二 読…経文を見て読むこと
- 三 誦…経文を暗唱すること
- 四 解説…経を解釈して人に説くこと
- 五 書写…写経すること

日蓮大聖人は、『祈禱抄』に「この経(法華経)の文字はすなわち釈迦如来の御魂なり」また、『法蓮抄』には「法華経の文字

は皆、生身の佛なり(中略)天台云く(中略)一々文々是真佛」と示されています。

すなわち、写経する法華経の一字一字が皆お釈迦様のお声・お言葉であり、生身の佛であり魂であるので、尊く有難くお写しする心が大切なのです。

ところで、書道を五十年間学んできて思うことに、昨今は携帯電話やスマートフォン、パソコンなどの普及がめざましく、ボタン一つで誰とでもつながる利便さを享受していますが、古来から大切にしていた、文字自体が持っている豊かな表現としての、伝える力を忘れていたのではないのでしょうか。文字は、本来手書きにこそ心と心をつなぐ働きのあることを、再認識したいものです。

近年、文化財保護法の改正があり、登録無形文化財保護制度が創設され、一昨年書

道が、登録無形文化財の第一号として登録されていることは、注目されることだと思います。

また、平素作品作りをしていて思いますに、無心で書くことが大切で、それが無性に楽しいのです。

作品を作るときには、雑念があつたり、良



自坊の書齋にて、書や作品についてお話しされる秋葉師

秋葉敬真師（東京 法成寺住職。毎日書道展審査委員、書道誌三耀社副会長）

く書こうという作意がある間は、決して書き上がりません。ですから、それら執着するものが無くなるまで、何枚も何枚も同じものを書き込むのです。ある時、ふっと無心で書いている自分に気付くときに作品が出来あがり、素直に楽しさを感じるのです。

さて、写経は、書道作品として楽しみを求めるものではございませんが、一字一字尊いみ佛の实在を信じ書き込むときには、心洗われ無心にして解放されるご自身を、きつと見つけられることでしょう。その大きな功德を授かる尊い修行を体験し、お続

けくださることをお祈りいたします。

南無妙法蓮華經 合掌

聖訓カレンダー

解説

千葉市 本行寺 朝倉俊泰

一月

われにほんの柱とならん

われにほんの眼目とならん

われにほんの大船とならん

開目抄

文永九年（一二七二）大聖人五十一歳

このご遺文は、文永9年（一二七二）に日蓮大聖人が御歳51歳にして、配流先である佐渡で著された『開目抄』の最も有名なお言葉です。

大聖人御在世の鎌倉時代は、南都六宗や天台宗・真言宗、念仏・禅など一見すると仏教がひろまり、栄えた時代のように見えます。

しかしこれらの宗派はすべて、釈尊の教えの最も重要な經典である『法華経』の教えに背くもので

した。そこで宗祖は『法華経』の

六万九千三三四文字の功德を七文

字にあつめたお題目を信仰の中心

に据えられて、正法弘通に邁進さ

れました。そんな宗祖に降りかかっ

た数々の大難小難の嵐、とくに極

寒の佐渡への流刑地において、宗祖

はご自身こそが『法華経』の中で

末法弘通を釈尊から直々に託され

た「如来の使者」であるとの自覚

を持たれ、「我れ日本の柱とならん、

我れ日本の眼目とならん、我れ日

本の大船とならん」との三大誓願

を述べられ、『法華経』勸持品第

十三の「我不愛身命・但惜無上

道」の覚悟を抱かれ、さらなる正

法弘通を誓われたのです。

世情が乱れきって、日蓮門下と

称する宗派ですら宗祖のご本意に

背く末法の今こそ、私たちは目を

開いて正しい教えを受持せねばな

りません。

二月

厄やくの年とし

災難さいなんを払はらわん秘法ひほうには
法華經ほけきょうに過すぎず

おれたさ えもんじょうごへんじ
太田左衛門尉御返事

弘安元年（二二七八）大聖人五十七歳

このご遺文は、弘安元年（二二七八）4月13日、宗祖が57歳の時に、熱心な信者のひとりである大田乗明おおたじょうみょうに宛てて身延から送られた書状の一節です。

本書は乗明が供養の品々とともに、自身が今年厄年にあたり、病に悩まされていると、厄払いの祈願を願い出たことに対する宗祖の御返事です。

宗祖は、厄年による病苦という

考え方に対して、生老病死を含む

諸々の苦しみは衆生にとつて避けがたいものであることを諭されたのちに、改めて丁寧わかりやすく『法華經』の要点である方便品第二の意味と、如来寿量品第十六に積尊が込められたご本意について説明されました。

そして唯一、積尊のご本意を説く『法華經』のみが心身の苦しきとともに歩む力を与えてくださる

だいろうやく
大良薬であり秘法であると説かれ、

いかなる災厄に遭つても、信心を持ち続けることが大切であると誠められ、方便品と如来寿量品を書写、厄を払うには『法華經』に勝る方法はないと断言されたのです。

末法には天変地異が私たちを襲います。治に居て乱を忘れず、有事に備えるとともに、何が起きても『法華經』とお題目をお唱えして乗り越えて参りましょう。

三月

衆生しゅじょうの心こころけがるれば土つちもけがれ
心こころ清きよければ土つちも清きよし

いっしょうじょうぶつしやう
一生成仏鈔

建長七年（二二五五）大聖人三十四歳

このご遺文は、建長7年（二二五五）宗祖が34歳の時に、篤信の信者のひとりである富木常忍とくぎじょうにんに宛てて書かれたお手紙の一節とされます。書題の「一生成仏」とは凡夫が今生において成仏できるといいう意味です。

宗祖は、八万法蔵と称されるほどたくさんある、釈尊のご二代の聖教の肝心である『法華經』を深く信じて南無妙法蓮華經とお唱えす

ることだけが一生成仏の方法であると説かれます。

また私たち衆生の信仰は小さいことだとしても、衆生の心と私たちがこの世界（国土）は実は繋がっていて、衆生が正しい信仰をすれば、その影響は国土（世界）全体の正邪清濁をも左右すると述べられます。

今、私たちの国の内外においては戦争・暗殺・事件・災害等が頻発

こしたんたん
しており、今まさに虎視眈々と我が国を侵略せんとする国もあります。もはや色々なことが対岸の火事ではない危険な情勢です。

このような末法の世が目の前で起こっている状況において、私たち一人ひとりの力は微々たるものです。『法華經』とお題目の正しい信仰を得て、これを一人でも多くの人々に弘めて、世を平らかにしていきたいきましょう。